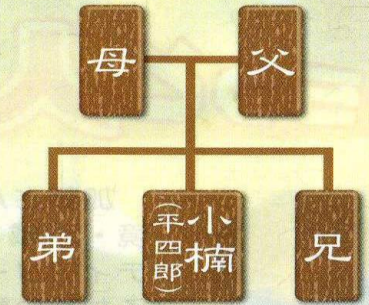


横井小楠 —その業績と生涯—



武士の家庭では、家の跡継ぎになる総領息子(主に長男)は大事にされましたが、二男、三男は「厄介者」(世話のかかる人)とが「部屋住み」と呼ばれていました。江戸留学を1年足らずで帰国させられた小楠は、兄の厄介者になり、貧しい暮らしをしなければなりません。そういう暮らしの中で、小楠はどのような学問を志したのでしょうか。

横井家(家系図)



4 小楠の苦学修養

横井家では、小楠が時習館で学んでいた23歳の時、父がなくなり、2歳上の兄が跡を継いでいました。

江戸から帰国した小楠は、肥後藩から70日間の逼塞(昼間は外出禁止)の罰を受け、兄の世話になりながら、水道丁(現在の安政町)の自宅で過ごさねばなりません。

しかも、当時の肥後藩は大変な財政難で、各藩士の俸給は減らされ、家禄150石の横井家も実収入が減り、家計は赤字続きでした。そのころの小楠の生活ぶりは次の様だったといわれています。「兄の家の6畳の間で謹慎しましたが、その部屋の畳は破れ、壁はポロポロにくずれ、雨戸がないのでわらむしろを軒からつり下げて雨風を防ぎ、縁側は青竹を束ねてありました。下男は1人いましたが、手不足なので、平四郎(小楠)は時には飯炊き、水汲みなども手伝いました。」(徳富蘆花※著『竹崎順子』より)

小楠はそういう状況のなかで、江戸留学中の酒による失敗を反省すると共に、これまでの学問を整理し、自らの実践に重点をおく朱子学の研究に没頭しました。

朱子学は、中国の宋の時代に朱子※によってあらたにまとめられた儒学の一派です。朱子学では、君と臣・父と子などの上下関係についてそれぞれの身分を守るべきだとする名分や社会での順序が決まりがきちんと整う秩序を強調し、礼儀作法を重んじました。これらは幕府や諸藩の受け入れるところとなり、朱子学は盛んにな

りました。

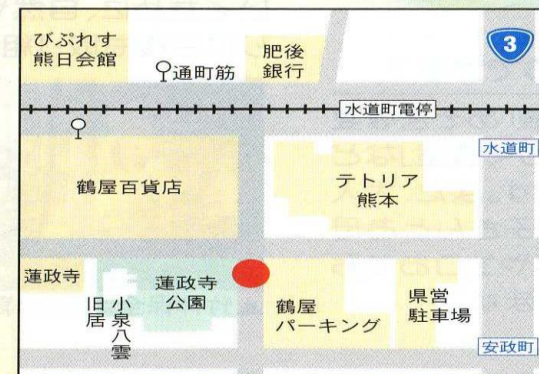
ところで、肥後藩はどうだったのでしょうか。藩校「時習館」の学風は、初代教授(学長)秋山玉山(1755年就任)の時は折衷学(色々な学派の長所をとって用いる学問)でした。しかし、2代目教授藪孤山(1766年就任)の時から朱子学に変わり、小楠が学んだ幕末のころも朱子学が中心でした。

※徳富蘆花(1868~1927)...

徳富一敬(横井小楠門人)の二男、本名健次郎。小説家。代表作『不如帰』。

※朱子(1130~1200)...

中国南宋の儒学者。朱子は尊称。



▲水道丁旧居跡



このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。